

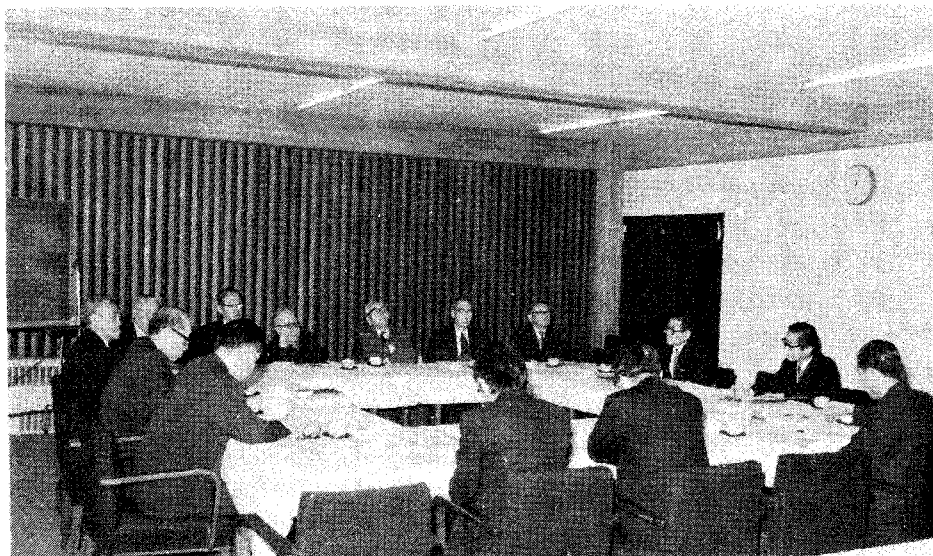
主要記事

本学の歩んだ途（その2）	
名誉教授を囲んで座談会	1
A.I.T. 最近の動き	3
学生課外活動の施設拡充	5
夏休み特集 読書のすすめ	5
海と山の厚生施設紹介	9
昭和50年度科学研究費内定	13

本学の歩んだ途

本学創立100周年記念行事

名誉教授を囲んで座談会（その2）



《本誌No.70（5月号）の続き》

小林 昭和14年から17年までに、いくつかの学科と研究所ができたようです。内田先生に化学工学科創設について、お話いただきたいと思います。

内田 私は工大に勤める前に、当時商工省の臨時窒素研究所にいたのですが、これは農商務省の時代にできたのです。私は、東大の応用化学科を卒業し、大正9年すぐそこに勤めました。ここはアンモニアの合成とか、アンモニアを酸化して硝酸を作るとか、メタノールの合成とか、尿素の合成



とかの研究をやっておりました。私はその研究所で、ラボラトリーというよりは、パイロット・プラントみたいなものを手がけていました。特にアンモニアから硝酸を作る方をやっておりました。

さて、この工大が大学に昇格するについて、先程の鯨井先生とか佐野先生とかと同じ立場の方に、田中芳雄先生がおられました。田中先生も、本学の大学昇格に非常に力を入れておられました。燃料工学科は、田

出席者

名誉教授 植村 琢
名誉教授 山田良之助
名誉教授 内田 俊一
名誉教授 佐々木重雄
名誉教授 古賀 逸策
名誉教授 森田 清

学 長 川上 正光
（百年史編集委員会委員）

○教 授 小林 靖雄
教 授 栗野 満
教 授 岸 源也
教 授 関根 太郎
教 授 田中 良平
教 授 室田 忠雄

蔵前工業会事務局長

経理部長 木下 四郎

遠藤 彊

庶務課長 齊藤正太郎

事務局長 齊藤寛治郎

（○印は委員長）

庶務部長 田崎 正

中先生を中心にして出来たものです。その田中先生を通じて、私に「今度、東京高等工業学校が昇格して、東京工業大学になるについては、実的な面に非常に力を入れなければならない。勤める気はないか」という話がありました。私個人としては、大学時代田中先生に、特にお教えを受けた経験がないので、恐らく私の恩師である亀山直人先生が、田中先生に話されたのではないかと考えております。

勤めていた研究所では、事務官というのは、石井事務官程偉い権限は持っていませんでした。ですから私は、工大に勤めてからも石井事務官に対して、研究所時代と同じようにしていたわけです。何か用があると事務官を電話で呼び出したり、「こっちへいらっしゃいよ。」位の態度でいました。恐らく石井事務官は、私のことを「生意気だ」と思われたと思います。

昭和13年、突如として石井事務官が「今度、化学工

学科を創設するので、設置の趣意書のようなものを書いて欲しい』と言ってられました。それまでは、学生をもっていない化学工学教室というものがありませんでした。分析もそうですし、物理化学も有機もそうでしたが、教室というのがいくつかありました。

小林 正式の学科以外の一般教育的なものは、全て「教室」という名になっていたようです。

内田 石井事務官とは、時々考えの相違等でやりあったりしたことがあるのですが、そんなことにも拘らず、お前の方の学科を創設するのだというのでびっくりしたのです。

小林 先生の手書かれた化学工学科設置理由書は、大変長文ですね。

内田 この話は中村学長からの話ではなく、石井事務官から直接話のあったものでした。

佐々木 ずっと後の話ですが、予算請求の立場から考えて、こういう話が文部省にあるからという可能性を睨んで行動するという点では、石井さんはなかなかやり手でした。石井さんは、文部省の職員養成所とかいうのをつくった人なんです。そのお弟子で工大に来られた方では、板谷健吾さんがいます。職員養成所を出た方は、皆、方々の大学で役職につき、活躍していたようです。石井さんは、そういう面を持っているから、中村学長を助けるのに最も適任な方でした。それに、この大岡山の土地を買い占めるといふ計画も、候補地をあげてやっている時から関係してしましたので、そういう点で非常に有効だったのではないのでしょうか。また、石井さんは人も集めました。機械の斯波先生、電気の鯨井先生、化学の田中芳雄先生、そして建築の佐野利器先生など。

川上 もう一人真島先生がおられます。

佐々木 精研のことなんですが、先は合理化技術研究所という名でした。そこではネジ関係をやっており、作ったものを測定して、精度の良いものを一級、二級、三級と別けるのです。ドイツでは、Rationalisierungが非常に進んでいましたので、その技術面を調査に行ってきた。帰国後、いろいろな測定とか精密仕事を主体にして、いろいろなものを入れた合理化技術、今の工業規格統一とかいう案を出しました。関口先生は、当時産業合理化委員会の委員でおられました。

小林 「六十年史」には、合理化技術研究所の名称はありませんね。

佐々木 産業合理化委員会は、商工省にありました。そこで関口先生から、合理化技術研究所の創設案を書いて欲しいと言われて、書きました。関口先生から「自分は東工大の教官であるので、学長の許可を得る前に、研究所をつくることを外に話すと具合が悪いから、まず学長に話す」と言うことで、学長に話されました。その後「合理化技術というのは良くないから、精密機

械研究所にしたらどうか」と言われました。その時、関口先生が話されたのは、本学創立の時に、四つの研究所を創る計画があったのだそうです。後からの全くの憶測なのですが、どうも工業材料と、精密機械、自動車、それにもう一つは、恐らく化学関係の何かだったのではないかと思います。自動車が入っていることは、後で関口先生から聞きました。

その後、私が学長に呼ばれ、それから想を新たににして諸外国の研究所の Industrial Section の部分を調べ、日本に欠けているものを、特に含めて創設案をつくりだしました。ですから研究所の設計図面は、私がひいたかもしれませんが、実際は工業大学の創立委員がこういう研究所をつくって、その成果を教育の面にも及ぼすというような創立委員たちの考えであったのではないかと想像しております。

山田 もう一つ忘れてならないことは、今の鯨井先生や田中先生その他の先生の他に、中村学長時代に非常に活躍され、物理化学教室の主任をしておられた田丸節郎先生がおられました。田丸先生は、ある点で非常に優れた計画性を持った方で、いろいろな意見を中村先生、あるいは石井事務官に提言されていたことを知っています。

佐々木 田丸先生が、本学の図書館を形成した功績はたいしたもの。また、当時理化学研究所のプランニングをやっておられたと思います。

古賀 田中先生のことは、専門が違ってはいますが、忘れてしまっていたのですけれども、田中先生、鯨井先生、佐野先生の三人は、東大工学部の先生で、年輩はほとんど同じ位でした。私は工大に勤める前から、この三人が個人的に非常に親密であることを知っておりました。真島先生は、理

化学研究所で主任研究員として勤めており、鯨井先生などと相当の接触があったようです。皆さんは個人的にも非常に気持が揃っていました。そういう方々が、ここをどうするか期せずして話されることは、それが見えない力になっていたような気がします。わざわざ寄って形式的な話をするというより、食事をしながらでも、その話になれば、あ、だこうだという話になったのではないかと気がします。ですから、私の想像ですが、このような先生方のお話が、中村先生に反映して、そこへ事務的な才能としては、実に優れた力を持った石井事務官が、それを駆使する原動力となっていたようです。

それからもう一つ、歴史上からは隠れたものになるのですが、先程、佐々木先生も言われた石井事務官のもとで活躍した板谷さんですが、その後仙台に行かれました。東北大学があれ程急に大きくなったのは、板谷さんの力によったということを私は知っています。



そういう有能な部下を持っていたということは、本学のためにも何かと役に立っていたのではなかったかと思えます。

佐々木 石井事務官のことですが、工大設置の時から関係し、これを仕上げることを一生の仕事にしていたようですね。精研の仕事で接触して驚いたことは、とにかく精研の仕事をやるとなると「精密機械部門とはどういうものか調べるので、参考書を貸して欲しい」といって、自分で本を読んで実態をこなしてから、折衝にかかるんですね。それでも予算が文部省を通ったのは4年かかりました。その間に、実に先を見ていろいろ動いておりました。研究所設置が予算的にも認められたのは、航空機工学科設置が認められた同年であり、大体時勢のためであったと、私は思っています。つまり、昭和12年という年が、日本の総予算が60億をちょっと超えた位で、未曾有の超予算だといわれた。その時、新規計画は全部削られたのですが、研究所と航空機工学科は認められているんです。航空機工学科は、昭和10年頃から航空勢力の拡充計画が軍部にありまして、その予算と計画をたてたのは、東大の航空研究所の人達で、それに生産関係のことで私も加わっていたのです。とにかく新規計画が全滅した時、航空機工学科と精研が通ったのです。ですから、これらが設置されたというのも、学校の中樞が社会情勢をうまく把えて、それに事務的手腕のある人が動いたというところじゃないでしょうか。

小林 どうもありがとうございました。山田先生、金属工学科が昭和16年4月に設置されたのですが、この事情を一つ……。

山田 昭和14年に準備会が出来て、昭和16年に金属工学科が出来ました。その頃、金属工学科というのは耳新しい学科名称であって、既設の大学では冶金学科というのが多かったのです。東北大学には、金属材料研究所を土台にしたような金属工学科が設置されまして、本学でも金属工学科を設置することになったのです。その後、本学で教授になられた河上益夫教授も、これを熱心に主張されました。金属工学科を創ろうということで、私も準備委員を命ぜられたのですが、その中に、東北大学の金属材料研究所におられて、その後金属工学科の主任教授になられた村上武次郎先生にも、委員にお加わりいただきました。

金属工学科が出来ると当たって、方々の学会で友人関係からいろいろな教授方のご推せんもあり、人選はそれ程、苦労がなかったと記憶しております。東北大学の金属工学科から、田中良平教授の前任者の岡本教授、それから旅順工科大学におられた伊沢猛三郎教授、九州大学におられた今井教授の推せんでした。不幸にして岡本教授、今井教授のお二人は非常に若くして亡くなりました。確か、始めは四講座でスタートしたと思います。理研におられた作井教授には、助教授で来

ていただきました。皆様ご存知の桶谷教授は、むしろ自薦の方です。「私を採って下さい」と言って、部屋へやって来られました。「未だ、そこまで話がいておりません。」と言うと、すぐ踵を訂して、「そうですか。」と言って忙しそうに出て行かれました。何回かそんな事がありました。非常に元気な方で、今とちっとも変わりありません。なかなか賑やかな学科構成が出来たように記憶しております。

昭和25年に伊沢先生が亡くなりました。これは、鉄道事故で、夜遅く大船から鎌倉の家へ線路伝いに歩いて帰られる途中、試運転の機関車に巻き込まれて、鎌倉のトンネルで死ぬという事故でした。戦後の疲弊時代で、丁度新聞記者が集まって参りまして、伊沢教授は、どういう人であったか尋ねられました。彼等の先入観では、大学の先生というのは、聞なんか出来そうもないので、食べるものもあまり食べないで自殺したのではないかと……ということ、取材に集まり、金属工学科の連中が集まっている所でいろいろ質問されました。「そういうことで自殺しなければならないのなら、ここに集まっている皆、自殺しなければならない。彼一人自殺するなんてあり得ない。これは全くの事故死だ。」というようなことを言った覚えがあります。金属工学科にとって、非常に不幸な事件でした。

金属工学科は、その後若い人達が順調に育っていかれて、学会でも何人か重きをなしておられる。その点、非常に結構なこと、思っております。

小林 どうもいろいろ有り難うございました。

《9月号に続く》

この記事は、百年史編集委員会資料より収録いたしました。

(広報委員会)

A.I.T.

最近の動き



A.I.T.というのは、世界で最初に設立された国際的な大学院大学である。これがタイ国の中にあることは最近かなりよく知られてきた。

A.I.T.というのは良くも悪くも東南アジア的で、世界中の人々に門戸を開放しているから、先生も学生も職員も種々雑多な国々より来ている。学生であっても回教国からくれば、

3人も4人も夫人を連れてくる人もある。従って A.I.T. ではいわゆる1人1室というような、寮についての悪平等が成立するわけもなく、1家族で4室位使っている学生もあれば、独身で1部屋に小さくなっている先生もいることになる。

1969年から71年に私が行っていた時には、A.I.T.はまだ小さくて、バンコク市内にあるチュラ大の一部を借りていた。72年にアユチャの近くに新キャンパスを作りあげてそちらに移転した。今度私が1973年から74年にかけて行った時には、学生数も450人と2倍位に大きくなっていった。

新キャンパスは約50万坪の広さである。平たい土地の50万坪というのは案外広く感じられない。1kmちょっと歩けば、端から端へついてしまうからである。その間にいろいろな蛇も見ることが出来る。建物はその敷地の端の方にコチョココチョコと建っているように見える。もちろん1つ1つの建物はそう小さいわけでもなく、工大の図書館クラスのものが10棟位と考えればよい。

A.I.T.は国際機関なので各国からの寄附で運営されている。どこの国の財政法でも建物を国際機関に寄附するのは比較的易しい。従って建物は何となく出来てしまった。

1972年に今のA.I.T.の基礎を作ったベンダー氏は学長を辞し、代ってホルシャー博士が新しく学長になった。ホルシャー氏はシステム関係の人で経済、経営問題にも明かるいということであった。

このホルシャー学長の方針というのは、A.I.T.の手持ち資金を活用してアジアに一大インパクトを与え、A.I.T.の名声をあげると同時に、更に多くの資金の導入を計ろうとするものであった。こう簡単にいい切ってしまうのは、ホルシャー氏に気の毒というものではあるが、私が理解したのはその程度のことであった。

A.I.T.にとって、更にホルシャー氏にとって不運であったことに、73年に例のオイルショックがおこった。

確かにA.I.T.を支持している国々、結局それは先進工業国となってしまうのだが、その経済が成長を続けていけばホルシャー氏の方針はうまく行ったのではないかとは思いますが、どうもそうは行かなかった。

といって、A.I.T.への基金補助が減ったわけではない。それよりもタイ国内の人件費の上昇、光熱水料の上昇が痛かった。先生方の中には大変心配して、もう少しケチケチやった方がよくはないか、とわざわざホルシャー氏に言いに行った人もいたようだが、ホルシャー氏もシステム解析家としての面目にかけて後へ引くわけには行かなかったであろう。助言に行った人々はどうも気まづくなったようであった。私も何となく心配ではあったが、経営にあたっている当のホルシャー氏が「大船に乗った気でいろ」と威勢が良いのでそんなものか、と思っていた。ホルシャー氏も頑固と

いえば頑固であるが、システム解析の結果を信じているその信念は仲々大したものであった。

そのうちに、74年の4月頃になると、さすがのホルシャー氏も弱ってきて、大緊縮財政を敷きはじめた。これが又仲々壮大なもので、例えば74年度の図書費は全部で500ドル、などという具合であった。当然、先頃文句をいいにいった先生方の中から、「それ見ろ、けしからん」という声が上がった。私はのんきなので「こういうことは、大抵何とかなるもんだ」などといっているのだが、そのうちに、日本の方に火がついてきた。これは、日本がA.I.T.に立派なプールを作ったのだが、どうも当初予定していたより沢山の塩素がいる。といっても、日本でいれる1/10位の量である。これは何か変な「淡水のり」のような植物がいる為であることは判った。これは卒直にいて日本側の設計又は予測の誤りである。ところが、ホルシャー氏はこのプールに月々500ドル位維持費がかかるのを発見して、もうプールはやめ、といい出した。

何しろ暑い所なので、プールは必要欠くべからざるものといってよい。二、三ヶ月の間は栗田工業が寄附したりしていたが、その内に本当にやめになってしまった。私は大使館や学生に文句をいわれる羽目となった。他にも同じようなことがいろいろあって、日本のみならず、いろいろな国の政府も当惑してしまうようなことがでて来た。その間、私も任期の1年が過ぎて、去年の暮に帰国してしまった。1月になると、アメリカの理事のローンズ氏（これはケイス大学の副学長である）が突然日本にやって来て、アメリカでも大変弱っている。（ホルシャー氏はアメリカ人）お前はと思うか、といい出した。私は、時期が良ければホルシャー流の積極策もよいかも知れないが、今は何分にも時期が悪い、と答えた所、アメリカでもそういう意見だ、ということで、2月の理事会で、ホルシャー学長はやめになってしまった。どうもここの所は大変はっきりしているが、又、そうでもしなければ、A.I.T.は黒字倒産みたいなことになりかねないので、やむを得ないことでもあったであろう。もっともホルシャー氏の方も大したもの、最後まで自説を曲げることなく、頑張っていたようで、それはそれで、評価できる態度であつたろうと思われる。なお後任には、とりあえず元学長のベンダー氏があたって二年程様子を見ることになった。

ホルシャー氏の去った後は現金なもので順調にA.I.T.の経済も回復し、現在東大、京大からそれぞれ2名行っている先生方も一安心のようである。それにしても今回の私の派遣では、こういった経済問題の物理に大分時間を取られ、あっという間に1年が過ぎてしまった。得難い経験でもあったが、将来あまり役にたたない経験とも思っている。

（工学部土木工学科水工学第一助教授 椎貝博美）

学生課外活動の施設拡充

音楽練習棟の落成を喜ぶ

このたび全学の御配慮によって音楽練習棟が建設されましたことを音楽サークルの学生諸君と共に喜んでいます。音楽練習本来のための棟として、防音装置のついた建物は国立大学では唯一のものであると聞いています。大学当局の課外活動に対する深い御理解を感謝致します。いま、で音楽サークルは主として旧蔵前記念館と分析棟横の木造の老朽建物を使用していましたが、大部分のサークルが新練習棟に移転したようです。私はかつてクロニクルに“大学に音楽を”ということをお願いをこめて書かしてもらったことがありますが、その一端がかなえられました。私は音楽鑑賞が好きですが、ベートーベンの音楽でも時によってやかましいと感ずることがあります。まして、規律のない、人の迷惑を考えない音楽練習には反対致します。音楽サークルの学生諸君が新しい練習棟で、このことをよく考え、清潔な規律ある練習にはげみ、技術的にも進歩したサークルになられることを望みます。と同時に、この大岡山キャンパスに本格的なミュージックホールが出来ないものかと今なお夢んでいます。

(元コールクライネス部長 桂 敬)

6月25日(水) 学長、関係教職員、学生出席のもと両施設の完成祝賀会が行なわれた。

新装なった

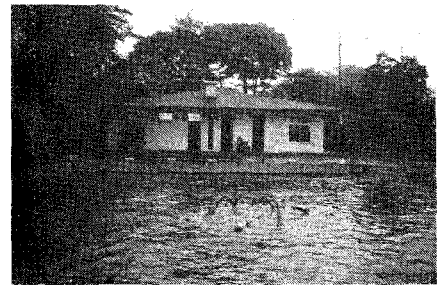
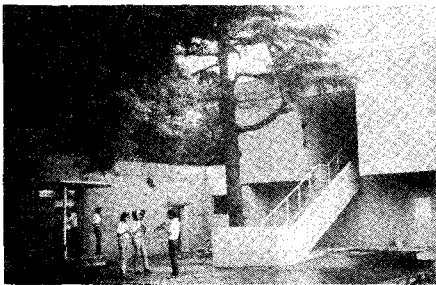
水泳部「プールサイドハウス」

このたび大学当局の格別の御配慮により、学内の環境整備の一環としてプールサイドハウスが竣工し、6月25日には落成祝の小宴がもたれました。

男子更衣室と女子更衣室、温水シャワールームのほか6帖和室休憩室、器具庫などを含め56㎡のしょう洒な赤屋根の建物です。和室は水泳部が使わせてもらっていますが、昨今の物価高のなかでの思いがけない贈りものに部員一同感激、練習に大張り切りです。これから汗を流すシーズンですが、全学のプールファンの方々にも大いに楽しんでいただけるものと確信しています。

戦後まもなく水力実験槽(25.0m、水深3m)を水泳プールとして使い練習を始め、水泳部を創られた高橋さん(現水泳部長、金属工学科教授)がきめ細かい理解を示され、当時の教務課の中島さん、また水泳好きな数学科の秋さん(本年3月退官)その他多くの方のまかれた種と御努力がこの赤い屋根に結実しており、大変に有難く、感慨も一しおです。水泳部も順調な発展をつづけ、これまでに150名以上の部員が卒業しています。新しい部室からプールの眺めていると、昭和23・24年前後の創立期の練習、夏のプールの一般公開で監視・救助員としてわれわれ水泳部員がアルバイトしたこと、あるいは理工科系大学対抗試合など色々な思い出が重なり、当時の歴史的な女子更衣室兼部室は今でも2坪の風呂場として面影をとどめ、プールサイドで役に立っています。

(水泳部顧問教官 谷口雅男)



夏休み特集

読書のすすめ

夏休みのために

一昨年の夏以来、“夏休み特集”なるものを企画し、人文社会・外国語の先生方をわずらわして、学生・教職員に対して“私のすすめる本”を掲載したところ、大変好評を得ているようですので、引き続き今年も企画し、下記教官にご執筆頂きました。

岩田 慶治 工学部一般教育等文化人類学教授

安倍 勇	工学部一般教育	英語 教授
平井 正	工学部一般教育	ドイツ語 教授
福田 豊彦	工学部一般教育	歴史学 助教授
野崎 睦美	工学部一般教育	英語 講師

岩田 慶治

ずいぶん昔のことであるが、人類の起源、つまり猿から人間にいたる道程をさぐってみようとして、東アフリカに出土する化石人骨に興味をもったことがあっ

夏休み特集



た。今はすっかり忘れてしまったが、発見された人骨のもつ特徴を数えあげ、整理し、配列してみると、形質人類学についてはまったくの素人ながら、人類進化の足どりを追跡することがある程度までは出来た。もちろん、専門家の評価にたえるわけではないが、それはそれなりに有益だったと思っている。

その後、アトランティス問題というのに少しばかり首をつっこんで文献を読みあさったことがある。アトランティス問題というのは、プラトンのティアイオスに記載されている貿易都市アトランティスの所在をめぐる推理である。それは北アフリカにあったのか、それとも、南イベリアにあったのか。プラトンの文章に記載されているヘーラクレースの柱との関係を手がかりに、当時のフォーナ、フローラを再構成し、キャラバン・ルートを復元しながら推理してゆくわけである。これも面白かった。結局のところ、スペインの図書館にでもいって調べなければどうにもなるまいと思ったが、最近では2~3の翻訳書もでて、わが国でもこの問題に対する関心が高まっているらしい。いずれにせよ証拠がごく僅かなのだから、あとは奇想天外な推理をたのしめばそれでよいわけである。

私が言いたいのは日本民族文化の起源論についてなのである。すでに邪馬台国をめぐる歴史的な論争をみても明らかなように、こういう問題は必ずしも専門家だけの独占物ではない。日本人はどこから来たか、日本語の系統はどこに求めるべきか、日本文化はどのようにしてこの島にいたり着いたか。そういう問題を夏の夜に考えてみるのもよいだろう。意外なところに推理のたのしみを発見するかもしれない。

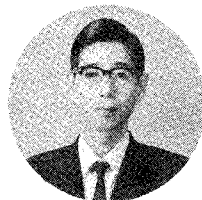
西村朝日太郎『海洋民族学』(NHKブックス)は太平洋をめぐる漁撈文化のひろがりを追跡した成果。原始的な漁具、漁法から漁撈文化をめぐる多様な側面が豊富な資料とともに解説されている。つまり、日本人の祖先が何処からきたにしても、こういうレールの上を移住してきたのであろうと思うと、それに日本、南シナ、東南アジアにいたる漁撈文化の類似性をたどってみると、われわれの推理の舞台装置をたしかめる面白さがある。村山七郎・大林太良『日本語の起源』(弘文堂)は表題の通りであるが、言語学者と民族学者の対談を通じて日本語のひろがりを知ることができる。そして特にこの本では日本語と南方諸語とのかかわりに脚光が当てられている。言語についての素人考えは危険が多いけれども、しかし、非専門家としてのユニークな視野は期待できるかもしれない。たとえば、言語の変化についての実験的な試みなど。

国分直一(編)『倭と倭人の世界』(毎日新聞社)には文身(入れ墨)、抜歯の習俗をもっていたシナ海周辺の東夷の文化圏が解明されている。こうして舟の問題、

稲の渡来の問題など、民族渡来の経路がいよいよ大詰めに近づくわけである。

しかし、このようにして日本民族文化の系統をさぐる著書をあげていては拾収がつかない。そこで最後に日本文化の伝統的な立場から、内から外へと日本の枠をこえて想像力をめぐらしたものとして柳田国男『海上の道』(角川文庫)をあげておく。日本民俗学の手法にしたがって、しかも、日本文化の枠をこえること、それは至難の試みである。『海上の道』はいわば柳田学の総決算として、この試みに挑戦したものと思われる。

安倍 勇



夏は暑くてとてもむずかしい本など読めるわけがないと早合点したうえで、動物好きな私は次の図書を寝ころんだままでも覗けるという理由で推せんします。

1. アンソニー・バーク&ジョン・レンダル著・藤原英司訳「ライオン街に行く」 平凡社

2人の白人がロンドンの百貨店からライオンの子供を買って、育て、やがて、そのライオンが大きくなるにつれて、自然に戻すことにする。かくてライオンは出身地のアフリカにまた消えてゆくという筋書。ライオンの自然への復帰にはこの物語では「野性のエルザ」関係の人間が相当協力しているので、うらやましいように話は進捗する。この物語の白人主人公は“動物が満足すべき状態で囲われている動物園はまだ一度も見たことがない”と述べ、捕われの動物のための最高の条件を備えた動物センターの構想を開陳している。訳者のあとがきは珠玉の名文。人間の好奇心や功名心を満たすために動物は生きているのではなく、また野生の動物をとじこめて飼育したり観察することは科学的研究法ではないと直言している。

しかし、自分で野に戻れぬ野生の動物が人間と共に暮して一生を終える物語もある。とくに群に戻れぬ種類のものは、一旦人間の保護下におかれたら面倒を見てやるよりほかないだろう。

2. クレア・キップス著・今田恵訳「スズメと私」 創元社

この本は訳書としては既に昭和31年に大久保康雄氏訳「小雀物語」新潮社があるが絶版で今回の再訳書の出現ということになっている。けがをした小雀を拾って育てる英国婦人の書いた本。(英国人の動物好きは定評がある)この雀は婦人と長く暮してやがて老い、身体も不自由になるが、最後まで不屈の意志をもって籠の中の一生を終える。婦人と雀との交情が美しく描かれてあって、観察力もするどい。本書の原名は、

~~~~~ 夏 休 み 特 集 ~~~~~

Sold for a Farthing で“2羽の雀は1銭にて売るにあらずや、然るに、汝らの父の許しなくば、その1羽も地に落つること無からん”という聖書の言葉よりつけられてある。ひとつかみの羽毛のかたまりの軽い雀の生命も神の前ではずっしりと重たい。どんな微少な個体も語るべき生活を持つと私は思う。

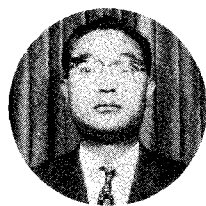
野生の鳥や動物というよりは、むしろ籠の中に安住するほうが落着いているペットと人間の織りなす人生を軽妙なタッチで描いているのが次の図書である。

### 3. 高橋達志郎著・「小鳥のお医者」徳間書店

本書は田園調布駅の近くで小鳥の病院を経営する獣医さんがしたためたもの。病気やけがで病院に持ちこまれるペットとその持主の人間のその時の表情を通して、いわゆるペットに興味の無い人達には、全く馬鹿げた手合たちがぞくぞく登場する。涙を流してペットの死体にわびる飼い主、etc. 籠の鳥と室内人間のコミュニケーションが当然落着く様相を呈している。本書を読むと、人間の愛の対象はどんなものでもOKということと、またいかに異種族間のコミュニケーションが厄介かが判る。加えて更に進んだ動物医学の必要性が痛感される。いわゆる物言わぬ動物の苦しみを人間は診断出来ない。おまけに死ぬまで動物は幸福そうに振舞う。別の本でK・ローレンツは“犬を飼う時には、離別の悲しみにあらかじめ備えよ”と忠告している。

以上3つの図書は、共通して動物が真に生きて、死ぬためには人間はコンテクストに応じて、どのように振舞うのが最も妥当で賢明で、良心的であるかといった難題を私たちに投げかけている。

## 平 井 正



オットー・ブルナー『ヨーロッパ—その歴史と精神』 岩波書店

歴史についての新しい考え方を学び取ることができる。「イデオロギーの時代」の章は、科学的社会主義という観念がイデオロギーとしてどういう意味を持つかを考えさせる。「神授王権から君主政原理へ」の章では、王権神授説などという一見神がかった考えの現実的根拠を知ることができるし、君主政原理というもので人々が抱いていた君主観がいかに相容れない多様な期待の収斂点として、奇怪ともいふべき矛盾を内包するものであったかがわかるであろう。そして名称は同じでも、皇帝原理がどのような機能変換を行ってその意味を更新して来たか、観念の機能としての意味を知ることができよう。

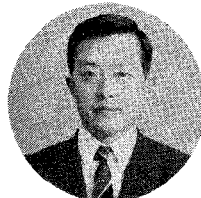
ハナ・アーレント『全体主義の起源』1. 2. 3. みすず書房。

今更言うまでもないアーレントの名著。はえが象を生み出すような、たんげいすべからざる人間の集団意識の現実、政治の現実についての鋭い洞察。全体主義の生成過程と全体主義とは何かについて考えるのに必読の書。

カール・クラウス著作集9・10『人類最後の日々』法政大学出版。

興味本位の終末論が横行する中にあって、クラウスの凝縮した文章による風刺は人間存在の根底をえぐり出して忘れ難い印象を与える。特異な文体を支える姿勢に対する省察は、愚にもつかぬ流行終末論への解毒剤となろう。

## 福田 豊彦



石母田 正「古代貴族の英雄時代—古事記の一考察」 歴史科学大系1. 校倉書店

若い諸君には古典的名論文を読むようにすすめたい。この論文は『論集史学』（三省堂1948）に発表されたもので、極めて入手し難く「幻の名論文」などと呼ばれていた。私も探し求めて得られず、某先生の秘蔵の図書をお借りし、かなりの部分を写しとった経験がある。その本も繰り返し読まれたものらしく、造本が壊れ、補修してお返ししたのであった。この幻の名論文が『歴史科学大系』第1巻に再録されたのだが、最近入手困難な基礎的論文が、この叢書や『論集日本文化の起源』（平凡社）、『論集日本歴史』（有精堂）などとして再刊されていることは誠に喜ばしい。

石母田氏のこの論文は、ヘーゲルの『美学講義』から出発し、高木市之助の叙事詩研究などの文学史上の成果をとり入れ、民族・国家の成立過程に諸民族が経験する混沌と激動の時代である英雄時代、およびその記憶を叙事詩に定着させる過程を論じ、これを日本歴史上に発見するという雄大な構想をもっている。この論文の発表を契機に、賛否両論華々しい英雄時代論争が数年にわたり展開された。基本的に賛同してこれを発展させようとする太田秀通『共同体と英雄時代の理論』（山川出版社）、藤間生大『日本武尊』（創元社）、根底的にこれに批判的な北山茂夫、上田正昭氏らの説（本書および『論集日本文化の起源』2収載）、文学の側からこれを論じた高木市之助『吉野の鮎』（岩波書店）や文学17巻10号所収の諸論文など、これらを併読されれば一層興味と理解が深まろう。

なお本書の解説者原秀三郎氏はこの問題提起に批判的で、英雄時代論争を過去のものとしておられるようであるが、私にはそのように思えない。現にこの叢書

## 夏休み特集

第3巻の解説者吉田昌氏はこの論文を高く評価しており、井上光貞氏もこの説の復活をはかっておられるようにみえる（『日本国家の起源』岩波新書）。論争が次第に学問よりも政治の次元に持ち込まれることによって、深められずに消耗してしまったのではなかろうか。価値体系の転換が話題となっている今日、英雄、英雄時代についても見直しが必要であろう。

## 小学館『日本の歴史』 社会集団の巻

10年前に刊行された中央公論社『日本の歴史』は長くベストセラーズを続け、いまだに広く読まれている。日ごろ細々とした実証的研究を重ねている専門史家が、体系的に時代像を画いて世に問うということは、歴史学の発達にも大きな意味がある。小学館『日本の歴史』もそうしたものであるが、前者になかった一つの特色は、各時代を代表する社会集団を正面からとりあげ、それぞれに一卷としたところにある。現在までに刊行された『古代豪族』（巻5・青木和夫著）『王朝貴族』（巻8・村井康彦著）『中世武士団』（巻12・石井進著）はいずれも力作で、最近の研究結果が盛り込まれ、新しい問題提起もなされている。『大名』（巻18）、『町人』（巻21）、『ブルジョアジーの群像』（巻28）なども大いに期待できよう。戦後の歴史を戦前と比べると、こうした社会集団に注目するようになったところの一つの特徴がある。その意味でこれらの書は、若い人々には勿論、戦前の歴史教育を受けた方々にも参考となろう。

## 加藤文三『学問の花開らいて—蘭学事始のなぞをさぐる』 かもしか文庫1・新日本出版社

これは杉田玄白とその蘭学事始を素材として、中学・高校生などの若い世代のために、学問の道の深さと面白さを知らせようとして書かれたものという。ここには史料諸本の系統づけやテキストの本文批判のような歴史学の基礎的作業があり、その上に田沼時代の再評価や儒学と洋学との密接な内的連関などが提起されている。これらの重要な問題を誠に平易に説かれる筆者の力量に私は感嘆した。所々に適切な補注もあって、より進んで調べることもできるように配慮されていることもよい。中学生にわかるものなどと馬鹿にしないで一読されるようにすすめたい。

## 野崎 睦美



1. 安吾と百聞のもの（版は問わない。安吾のものは角川文庫、百聞のものは新潮文庫が便利である）この二人の作家の間にはどこことって共通点はない。あるとすれば、それぞれの形で男らしい強烈な「毒」をもった作家だという点だろう。安吾の八方破れの純粋

さ、百聞の依固地ともいえる生活の美学—これらにあてられると仲々回復はおぼつかない。『墮落論』をはじめとする安吾のエッセイ類には、時には理論的飛躍も目につく。しかし、相手を引きずり込む熱い息づかい、それによりいささかも減ずることではない。人間をぎりぎりの共通分母に還元して、なおかつ愛せずにはおれない彼の無類の人類愛は、必ず読む者に清々しい興奮を与えてくれるだろう。百聞の随筆については殊更いい立てる必要はないと思う。「散らかる」とみえて「散らからぬ」文の流れ、簡潔に徹して余情を生み出す文体を、加えてあの上質の日本的ユーモア。本ものの随筆の味を存分に堪能して欲しい。なお、安吾の小説としては『桜の森の満開の下』や『夜長姫と耳男』の他に、未完の『吹雪物語』もぜひ推したい。

2. 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男—伝説とその世界—』（平凡社）最近の出版傾向で目立つのは、伝記ものの出版と、一流の学者が自らの学問の蘊蓄を解り易い随筆の形で示してくれるようになったことである。前者としては、塩野七生氏の一連のイタリア・ルネッサンスもの、故渡辺一夫氏のルネッサンス・フランス王朝ものが頭に浮かぶし、後者としては、野上素一氏『ダンテ—その華麗なる生涯—』や、やはり最近故人となられた矢代幸雄氏『随筆ヴィーナス』などを挙げる事ができよう。『笛吹き男』はその中間に位するものであり、これらの書物に較べれば多少考証が勝っていて読みにくいかも知れない。しかし、中学校の英語のテキストなどを通じてお馴染みの笛吹き男に連れられていった子供たちはどこへ行ったのか、笛吹き男とは誰であったのか、どういう経路を辿ってこの話が出来上ったのか、といった問題を様々な資料を繋ぎ合わせて探っていく本書は、最近出色の考証文学である。後半やや主題が分裂してぼやけてしまうのは惜しまれるが、真摯な学問的姿勢と中世の名もない農民や旅芸人に対する溢れるばかりの愛情が、さわやかな後味を残してくれる。

3. 平野敬一『マザー・グースの唄』（中公新書）読んでいて楽しいだけでなく、ためにもなる本として。英語の真の理解は民間伝承や童謡についての知識なしには不可能であるということを、豊富な実例とともに語りかけてくれる書物である。時として語の用法や韻律に関する時代的考証まで顔を出す、それが門外漢にも苦にならない程によくこなれている。著者には他に『マザー・グースの世界』（ELEC出版）といった同種のものもある。こちらの方は伝承童謡からみた民族性の問題にまで触れ、言葉を学ぶことの難しさと意義を、確かな語学力の生む強い説得力をもって、改めて認識させてくれる。いずれも好著である。

最後に、暇をもて余して、肩のこらない長いものを読んでみたいと思われる方は、フックス『風俗の歴史』（角川文庫）とかデュマ『ダルタニアン物語』（講談社）をどうぞ。

## 海と山の厚生施設紹介

### 厚生課

本学には、学生及び教職員のための海と山の合宿研修施設があり、研修・合宿・レクリエーション等に広く利用されています。各施設とも管理人が常駐して施設の管理に当たっておりますので、四季を通じて利用することが出来ます。

#### 大貫臨海宿舎

茨城県東茨城郡大洗町大貫角一  
電話 (02926) 7-5007

臨海宿舎は、水戸からバスで約30分の大洗町の大貫海岸を背にした松林の中にあり、2～4室を有する木造平屋の宿泊棟が4棟、浴室及び卓球室、鉄筋コンクリート造りの食堂兼研修棟等がある。涸沼川沿いの艇庫には、ローボートを2艘備えているので、川や沼の探勝、魚釣りに利用するとよい。

近くには、原子力動力燃料センター、海に関する模型を展示した海洋博物館、明治・大正天皇の御物及び維新の志士の遺品を陳列した常陽明治記念館、海水浴場、大洗ゴルフ場、涸沼川の釣り場等があるので、研修、合宿、レクリエーション等広く利用出来る。

#### 交通

上野 (国鉄常磐線) 急行1時間30分 水戸 (茨城交通バス) 30分 大貫角一 (宿舎)  
バスは水戸駅前で「鉾田行」に乗り「大貫角一」で下車。宿舎はバス停前。

#### 木崎湖

長野県大町市大字平字南平  
合宿研修所 電話 (02612) 2-2756

研修所は、鹿島槍、五竜岳等を背景に木崎湖を眼下に見おろす斜面にあり、研修、合宿、登山、スキーなどに、四季を通じて利用されている。建物は鉄筋コンクリート2階建てで、ベッドルーム、

食堂兼研修室、浴室等、設備も完備しているので、少人数のゼミナールに適している。

交通 新宿 (国鉄中央本線・大系線) 急行5時間 信濃大町 (国鉄大系線) 普通13分 海ノ口 (徒歩) 10分 研修所

#### 鹿沢山岳宿舎

群馬県吾妻郡嬬恋村鹿沢  
電話 (02799) 8-0552

山岳宿舎は、2,000m級の山々に囲まれた湯ノ丸牧場を背に、眼下に溪流を望む斜面に建ち、10畳5室の宿泊室、乾燥室、炊事場等があり、昨年宿泊室の全面改装を行い面目を一新した。登山、ハイキング、スキー等の基地として恵まれた環境で、附近には休暇村国民宿舎もあり、合宿、レクリエーションに適している。

#### 交通

上野 (国鉄上越線・吾妻線) 急行3時間 万座・鹿沢口 (国鉄バス) 45分 鹿沢温泉 (徒歩) 10分 宿舎  
バスは万座・鹿沢口駅前で「鹿沢温泉行」に乗り終点で下車。又は「新鹿沢温泉行」に乗り終点で「鹿沢温泉行」に乗り継ぐこと。

#### 利用手続

ア 施設を利用するときは、宿泊可能かどうかを厚生課寮務掛 (内線2062番) に問合せ、宿泊可能ならば申込書を提出し、使用許可書の交付を受けて下さい。

イ 申込み後に取消し、使用期日、期間又は人数等を変更するときは、事前に寮務掛に申出て使用許可書の訂正を受けて下さい。

ウ その他詳しいことは、寮務掛に問合せ下さい。

| 施設名      | 定員  | 運 営 費              |      |      |            | 食 事 代              |      |      |
|----------|-----|--------------------|------|------|------------|--------------------|------|------|
|          |     | 期                  | 月～月  | 1泊   | 2泊目から1泊につき | 朝                  | 昼    | 夕    |
| 大貫臨海宿舎   | 39人 | 夏                  | 4～10 | 200円 | 150円       | 200円               | 250円 | 550円 |
|          | 冬   | 11～3               | 250円 | 200円 |            |                    |      |      |
| 木崎湖合宿研修所 | 20人 | 夏                  | 5～9  | 200円 | 150円       | 200円               | 250円 | 450円 |
|          | 冬   | 10～4               | 300円 | 250円 |            |                    |      |      |
| 鹿沢山岳宿舎   | 25人 | 夏                  | 5～9  | 200円 | 150円       | 自炊<br>(炊事用具・食器類完備) |      |      |
|          | 冬   | 10～4               | 300円 | 250円 |            |                    |      |      |
| 備考       |     | 運営費は申込時に厚生課に払込むこと。 |      |      |            | 食事代は現地で管理人に払込むこと。  |      |      |

(昭和50年7月1日実施)

## 大学院修士課程

### 入学者の学部出身学科

過去3年間に亘る大学院修士課程入学者について、その出身学科を調査した。

その結果、理工学研究科の各専攻については、原子核工学専攻を除き対応する学部学科の出身者が占める

比率は高く、70～80％に達している。また、出身学科数も2～4に限られている。

一方、今年度からスタートした総合理工学研究科の各専攻については、それぞれの専攻入学者の出身学科は、電子システム専攻を除き広く分布し、特定の学部学科の出身者が50％を超しているものは少ない。

なお、表中◎印は、各専攻における入学者数の内、当該学科出身者数の比率が50％以上を示すものである。○印は、同50％以下のものを示す。

| 学 科 名<br>専 攻 名                       |                 | 学 生 の 学 部 で の 出 身 学 科 名 |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|--------------------------------------|-----------------|-------------------------|-------------|--------|-----------------------|------------------|------------------|----------------------------|----------------------------|------------------|-----------------------|------------------|----------------------------|----------------------------|------------------|------------------|-------------------------|----------------------------|------------------|------------------|-------------|------------------|
|                                      |                 | 数<br>学                  | 物<br>理<br>学 | 化<br>学 | 応<br>用<br>物<br>理<br>学 | 情<br>報<br>科<br>学 | 金<br>属<br>工<br>学 | 有<br>機<br>材<br>料<br>工<br>学 | 無<br>機<br>材<br>料<br>工<br>学 | 化<br>学<br>工<br>学 | 高<br>分<br>子<br>工<br>学 | 機<br>械<br>工<br>学 | 生<br>産<br>機<br>械<br>工<br>学 | 機<br>械<br>物<br>理<br>工<br>学 | 制<br>御<br>工<br>学 | 経<br>営<br>工<br>学 | 電<br>気・電<br>子<br>工<br>学 | 電<br>子<br>物<br>理<br>工<br>学 | 情<br>報<br>工<br>学 | 土<br>木<br>工<br>学 | 建<br>築<br>学 | 社<br>会<br>工<br>学 |
| 理<br>工<br>学<br>研<br>究<br>科           | 数 学             | ◎                       |             |        | ○                     |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 物 理 学           |                         | ◎           |        | ○                     |                  |                  |                            |                            | ○                |                       |                  |                            |                            |                  |                  | ○                       |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 化 学             |                         |             | ◎      |                       |                  |                  |                            |                            | ○                | ○                     |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 応 用 物 理 学       |                         | ○           | ○      | ◎                     |                  |                  |                            | ○                          |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  | ○                       |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 情 報 科 学         | ○                       |             |        | ○                     | ◎                |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 金 属 工 学         |                         | ○           |        |                       |                  | ◎                |                            |                            |                  |                       | ○                |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 繊 維 工 学         |                         |             |        |                       |                  |                  | ◎                          |                            | ○                |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 無 機 材 料 工 学     |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 化 学 工 学         |                         |             |        |                       |                  |                  |                            | ○                          |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 合 成 化 学         |                         |             | ○      |                       |                  |                  |                            | ○                          | ◎                | ○                     |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 高 分 子 工 学       |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 機 機 工 学         |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       | ◎                | ○                          |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 生 産 機 械 工 学     |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       | ○                | ◎                          | ○                          |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 機 械 物 理 工 学     |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       | ○                |                            | ◎                          |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 制 御 工 学         |                         | ○           |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       | ○                |                            | ○                          | ◎                |                  | ○                       |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 経 営 工 学         |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  | ◎                |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 電 気 工 学         |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 電 子 工 学         |                         | ○           |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            | ○                |                  | ◎                       | ○                          |                  |                  |             |                  |
|                                      | 電 子 物 理 工 学     |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
| 土 木 工 学                              |                 |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            | ◎                |                  |             |                  |
| 建 築 学                                |                 |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  | ◎                |             |                  |
| 社 会 工 学                              |                 |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            | ○                | ○                     |                  |                            |                            | ○                |                  |                         |                            |                  | ○                | ◎           |                  |
| 原 子 核 工 学                            |                 | ○                       | ○           | ○      |                       | ○                |                  |                            |                            | ○                | ○                     | ○                |                            | ○                          |                  |                  | ○                       |                            |                  |                  |             |                  |
| 総<br>合<br>理<br>工<br>学<br>研<br>究<br>科 | 物 理 情 報 工 学     | ○                       | ○           |        | ○                     |                  |                  |                            | ○                          | ○                | ○                     | ○                |                            |                            | ○                |                  | ○                       | ○                          |                  |                  |             |                  |
|                                      | 電 子 化 学         |                         | ○           | ○      |                       |                  |                  |                            |                            | ◎                | ○                     |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 社 会 開 発 工 学     |                         |             |        |                       |                  | ○                |                            | ○                          |                  |                       | ○                | ○                          |                            |                  | ○                |                         |                            |                  | ○                | ◎           | ○                |
|                                      | 精 密 機 械 シ ス テ ム |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       | ○                | ○                          | ○                          | ○                |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 材 料 科 学         |                         | ○           |        |                       |                  | ○                |                            | ○                          | ○                |                       | ○                |                            | ○                          |                  |                  | ○                       |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 電 子 シ ス テ ム     |                         |             |        |                       |                  |                  |                            |                            |                  |                       |                  |                            |                            |                  |                  | ◎                       | ○                          |                  |                  |             |                  |
|                                      | 化 学 環 境 工 学     |                         |             | ○      |                       |                  |                  |                            | ○                          | ○                | ○                     |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | 生 命 化 学         |                         |             | ○      |                       |                  |                  |                            |                            | ◎                | ○                     |                  |                            |                            |                  |                  |                         |                            |                  |                  |             |                  |
|                                      | エ ネ ル ギ ー 科 学   |                         | ○           |        | ○                     |                  |                  |                            |                            | ○                |                       | ○                |                            |                            |                  |                  | ○                       |                            |                  |                  |             |                  |
| シ ス テ ム 科 学                          | ○               |                         |             |        |                       |                  | ○                |                            |                            |                  |                       | ○                | ○                          | ○                          | ○                | ○                |                         | ○                          |                  |                  |             |                  |



## 学会・協会賞受賞者の紹介 (その2)

本学教職員で、各学会・協会賞、功績賞、業績賞、論文賞、技術賞、奨励賞及び進歩賞等を受賞する件数が逐年多くなってきております。本誌No.58号では、1970年～72年までの受賞者を集録し、掲載いたしましたが、今回は、最近3年間に受賞された分について紹介いたします。

### 計測自動制御学会

#### 論文賞

1974年 古田 勝久 工学部制御工学科助教授 工学博士〔多変数系の同定〕

### 電気学会

#### 著作賞

1975年 深尾 毅 工学部情報工学科教授 工学博士〔システム理論入門〕

### 電子通信学会

#### 論文賞

1975年 関口 利男 工学部電気・電子工学科教授 工学博士〔二本線形導波構造のアンテナ理論による解析と特性〕  
末松 安晴 工学部電気・電子工学科教授 工学博士〔多状態誘電体光導波路の屈折率分布と群遅延特性〕  
古屋 一仁 工学部電気・電子工学科助手 工学博士〔多状態誘電体光導波路の屈折率分布と群遅延特性〕

### 米沢賞

1975年 石原 宏 大学院総合理工学研究科電子システム専攻助手 工学博士〔MOSFETのゲートしきい値電圧制御のための最適イオン注入条件〕  
古屋 一仁 工学部電気・電子工学科助手 工学博士〔外部高屈折率層誘電体導波路における擬導波状態とその放射特性〕

### 米沢記念学術奨励賞

1974年 木田 拓郎 大学院総合理工学研究科物理情報工学専攻助教授 工学博士〔抵抗終端リアクタンス二端子対回路網における群遅延時間特性の素子感度の二、三の評価式〕

### 土質工学会

#### 論文賞

1974年 山口 柏樹 工学部土木工学科教授 工学博士〔土の塑性力学的研究〕

### 土木学会

#### 論文賞

1974年 日野 幹雄 工学部土木工学科教授 工学博士〔水文流出系予測へのカルマン・フィルタ理論の適用〕

### 論文奨励賞

1974年 竹内 邦良 工学部土木工学科助手 Ph.D. MRP工学修士〔大規模貯水池群の最適制御に関する研究〕

### 日本機械学会賞

1973年 益子 正己 工学部生産機械工学科教授 工学博士〔三次元切削の基礎的研究〕

白井 英治 工学部機械物理工学科教授 工学博士〔三次元切削の基礎的研究〕

白鳥 英亮 精密工学研究所教授 工学博士〔バウシinger効果を考慮した異方性降伏曲面〕

池上 皓三 精密工学研究所助教授 工学博士〔バウシinger効果を考慮した異方性降伏曲面〕

金子 堅司 精密工学研究所助手 工学博士〔バウシinger効果を考慮した異方性降伏曲面〕

1974年 阿武 芳朗 工学部生産機械工学科 工学博士〔機械加工された2平面接触部の変形機構〕

塚田 忠夫 工学部生産機械工学科 工学博士〔機械加工された2平面接触部の変形機構〕

中澤 一 工学部機械物理工学科教授 工学博士〔疲れき裂の進展挙動に関する研究〕

小林 英男 工学部機械物理工学科助教授 工学博士〔疲れき裂の進展挙動に関する研究〕

本間 寛臣 工学部機械物理工学科助手 工学博士〔疲れき裂の進展挙動に関する研究〕

富田 幸雄 工学部機械工学科教授 工学博士〔希薄高分子溶液の流動に関する研究〕

持丸 義弘 工学部機械工学科助手 工学博士〔希薄高分子溶液の流動に関する研究〕

### 日本建築学会

#### 論文賞

1974年 乾 正雄 工学部建築学科助教授 工学博士〔視環境の心理的評価法の建築設計への応用に関する研究〕

### 日本鉄鋼協会

#### 西山記念賞

1974年 鈴木 朝夫 精密工学研究所助教授 工学博士〔時効硬化性鉄合金の金属組織的研究〕

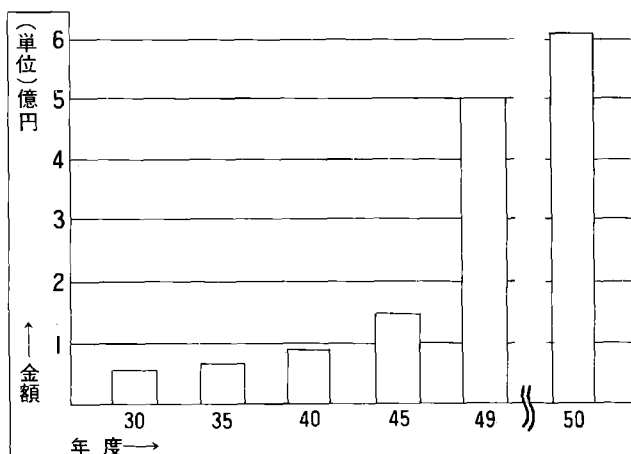
1975年 後藤 和弘 工学部金属工学科助教授 Ph.D. 工学博士〔鉄鋼製煉の基礎研究への固体電解質の応用〕

## 昭和50年度科学研究費内定

昭和50年度の文部省科学研究費補助金は、6月上旬内定されました。本学関係分は総計 201 件、617,790 千円で、その内訳は次の通りです。（昭和49年度は総計 185 件、501,730 千円）

|          | (件 数) | (交付額千円) |
|----------|-------|---------|
| 一般研究 (A) |       |         |
| 新規       | 9     | 145,070 |
| 継続       | 7     | 22,200  |
| 一般研究 (B) |       |         |
| 新規       | 21    | 111,100 |
| 継続       | 12    | 19,350  |
| 一般研究 (C) |       |         |
| 新規       | 33    | 54,510  |
| 継続       | 6     | 4,630   |
| 一般研究 (D) | 12    | 4,780   |
| 奨励研究 (A) | 43    | 13,960  |
| 特定研究 (1) | 11    | 85,150  |
| 特定研究 (2) | 6     | 33,100  |
| 試験研究 (1) | 2     | 4,300   |
| 試験研究 (2) |       |         |
| 新規       | 20    | 42,290  |
| 継続       | 5     | 4,200   |
| 総合研究 (A) | 9     | 40,580  |
| 総合研究 (B) | 3     | 3,270   |
| 自然災害 (1) | 1     | 27,400  |
| 自然災害 (2) | 1     | 1,900   |
| 合 計      | 201   | 617,790 |

科学研究費補助金配分額表



本学教官の研究に対する科学研究費補助金配分額の実績は、昭和45～6年を境に急増している。この増加の割合は、最近の物価上昇を考慮にいれても、なお相当な急増といえよう。

これは本学における研究教育活動の質的充実と関連をもつものと考えられると思われる。

## ベトナム・カンボジア

## 留学生援助の活動

去る5月13日(火)開かれたベトナム・カンボジア留学生の指導教官・助言教官懇談会(既報 本誌5月号)がきっかけとなり、教授会メンバーを発起人とした募金活動がスタートした。この両国の最近の国際情勢の急変によりこの募金の援助の対象となる学生は40名に達すると思われる。現存教授会メンバーはもとより、多くの教職員からの協力がよせられている。(問い合わせ先: 教務課第二教務掛)

**学内で流血の暴力事件発生** 6月23日午後零時55分頃、学内において流血の暴力事件が発生した。これは最近における他大学その他の情勢から心配されていた事態であるが、本学としては残念な不祥事といわざるを得ない。これに対して同24日付教務部長よりこれに対する厳重警告にあわせて今後この種事件発生防止のための協力要請が出された。

## 昭和50年度 就職斡旋事務

昭和51年3月の卒業見込み予定者に対する就職斡旋事務開始時期等について審議するため、去る6月10日(火)、各学科の就職担当者による就職担当教官懇談会が開催された。

今年度の就職斡旋事務は、中央雇用対策協議会の決議に基づいて審議された結果、概ね下記の通り決定されたが、それによると求人申込み等の発表が9月1日からとなっており、昨年度に比べ3カ月遅くなっている。又、就職関係書類の交付は例年通り10月1日以降で、企業側からの青田買い防止が伺える。

- 採用者側からの求人申込み等の発表は、9月1日からとする。
- 就職担当教官が推せんを開始する時期は、9月16日以降とする。
- 就職関係のために使用する証明書(成績証明書・卒業見込証明書)の交付は、10月1日以降とする。

? 前号(No.71, 5月号)では、本学の創設時の名称等を問いましたが、今回は……!!

1. 本学の前身校である東京職工学校時代の初代校長は、どなたでしたでしょうか。
2. 情報処理センター横に建っている胸像は、どなたでしょうか。

又、その方は本学にとって、どのような方であったでしょうか。(正解は14頁) ?

○就職担当教官以外に求人の申込みがあった場合は、就職担当教官に連絡し処理する。

○大学院学生については、原則として学部準じて取扱い、特別なケースについては、就職担当教官の判断により適宜処置する。

なお、昭和50年度の就職担当教官は次の通りである。

| 就 職 担 当 教 官 |        |     |       | 大 学 院 専 攻 主 任    |          |     |       |
|-------------|--------|-----|-------|------------------|----------|-----|-------|
|             | 学 科    | 職 名 | 氏 名   |                  | 専 攻      | 職 名 | 氏 名   |
| 理<br>学<br>部 | 数 学    | 教授  | 菅野恒雄  | 理<br>工<br>学<br>部 | 数 学      | 教授  | 石原 繁  |
|             | 物 理 学  | 教授  | 小田幸康  |                  | 物 理 学    | 教授  | 市村 浩  |
|             | 化 学    | 教授  | 桂 敬   |                  | 理 化      | 教授  | 須藤六郎  |
|             | 応用物理学  | 教授  | 久武和夫  |                  | 応用物理学    | 教授  | 本尾 實  |
| 工<br>学<br>部 | 情報科学   | 教授  | 森村英典  |                  | 情報科学     | 教授  | 梅垣寿春  |
|             | 金属工学   | 教授  | 高橋恒夫  |                  | 金属工学     | 教授  | 春山志郎  |
|             | 有機材料工学 | 教授  | 久世栄一  |                  | 繊維工学     | 教授  | 砺波宏明  |
|             | 無機材料工学 | 教授  | 宇田川重和 |                  | 無機材料工学   | 教授  | 越後谷悦郎 |
| 工<br>学<br>部 | 化学工学   | 教授  | 伊藤四郎  | 工<br>学<br>部      | 化学工学     | 教授  | 片山功蔵  |
|             | 合成化学   | 教授  | 小松和蔵  |                  | 高分子工学    | 教授  | 田村 博  |
|             | 高分子工学  | 教授  | 河合 徹  |                  | 機械工学     | 教授  | 梅谷陽二  |
|             | 電気化学   | 教授  | 松田博明  |                  | 生産機械工学   | 助教授 | 森永智昭  |
| 工<br>学<br>部 | 機械工学   | 教授  | 中原一郎  |                  | 機械物理学    | 助教授 | 秋庭雅夫  |
|             | 生産機械工学 | 教授  | 阿武芳朗  | 工<br>学<br>部      | 制御工学     | 教授  | 関口利男  |
|             | 機械物理学  | 教授  | 中沢 一  |                  | 電気工学     | 教授  | 渡辺 隆  |
|             | 制御工学   | 教授  | 寺野寿郎  |                  | 電子工学     | 教授  | 篠原一男  |
| 工<br>学<br>部 | 経営工学   | 教授  | 小林靖雄  |                  | 土木工学     | 教授  | 石原舜介  |
|             | 電気工学   | 教授  | 宮入庄太  |                  | 社会工学     | 教授  | 織田暢夫  |
|             | 電子工学   | 教授  | 日野幹雄  | 工<br>学<br>部      | 原子核工学    | 教授  | 辻内順平  |
|             | 電子物理学  | 教授  | 吉岡 丹  |                  | 物理情報工学   | 教授  | 佐藤 実  |
| 工<br>学<br>部 | 土木工学   | 教授  | 山田圭一  |                  | 社会開発工学   | 教授  | 松井昌幸  |
|             | 建築学    | 教授  |       |                  | 精密機械システム | 教授  | 吉本 勇  |
|             | 社会工学   | 教授  |       |                  | 材料科学     | 教授  | 中村正久  |
|             |        |     |       |                  | 電子システム   | 教授  | 武者利光  |
|             |        |     |       |                  | 化学環境工学   | 教授  | 白井 隆  |

を担当する教員並びに都道府県教育委員会指導主事を対象に行って来たが、昨年度からは中学校の産業教育担当教員にまで対象者を広め、その分野における指導者養成に尽力し、教育面において社会に大きく貢献している。

この講座についての評価は、各都道府県において極めて好評であり、今後も開講を望む声が高い。開講時期は、学生の夏休み中を利用して行われるため、7月中旬から8月中の盛夏に実施されるが、毎年、各教育委員会の推せんを受けて受講する者が100名以上に達している。

なお、今年度の講座内容は「教育工学についての講義と演習」が予定されているので、この分野を志す関係者多数の参加が想定されている。

1. 正木退蔵校長、(手島精一校長と答えた方は残念でした。同氏は二代目の校長です。)

2. 前身校の二代目校長 手島精一氏、明治23年～大正5年に至る27年の長年に亘って校長として在任し、本学の前身である工業専門学校としての充実に尽力され、我が国の工業教育の進展のために偉大な寄与をなした方である。

## 編 集 後 記

◇ 本誌No.70(5月号)では、百年史編集委員会が、名誉教授を囲んで行っている座談会記事を収録し、本学の大学昇格当時の記事を掲載しましたが、本号では、幾つかの学科と研究所の創設時の記事を掲載いたしました。

◇ 一昨年から毎年7月号に、夏休み特集記事として“読書のすすめ 夏休みのために”を掲載しておりますが、今年度も5名の教官に御執筆頂きました。推せん図書は何冊かは熟読され、皆さんに何かを与えてくれることを願っております。

◇ 前号No.71(6月号)からの新企画、クイズ? はいかがでしょうか。今後も御期待下さい。なお、8月号は例年通り休刊いたします。

## 産業教育指導者養成講座

——本年も夏休み中に開講——

産業教育に必要な知識と技術を習得させ、その指導者としての資質の向上を図ることを目的として、従来から実施して来た産業教育指導者養成講座は、昭和50年度においても学生の夏休み期間中を利用して、7月17日(木)から23日(水)までの6日間に亘って実施されることになった。

この講座は、本学と文部省の共催で、昭和27年度から実施しているもので、高等学校の工業に関する教科

## 東京工大クロニクル No.72

昭和50年7月10日

東京工業大学広報委員会 発行

東京都目黒区大岡山2-12-1

Tel. (726) 1111 内線 2032